

## 目 次

1 . 「 会 報 第5号 」 と 「 第 三 回 懇 親 会 」	今 井 哲 二	2 頁
2 . 「 メール 」 と 「 ハ ガ キ 」 に よ る 会 員 の 近 況 報 告		3
3 . 第 三 回 懇 親 会 出 席 者 の ス ピ ー チ ( 前 半 )		5
4 . 第 三 回 懇 親 会 の 決 定 事 項 等		12
5 . 私 の 原 点 に あ る も の ( そ の 2 )	坪 井 孝 光 S36 年 卒	13

# 会 報 第5号

「 今井研卒研究生の会 」

2004. 9. 30

## 1. 「会報 第5号」と「第三回懇親会」

今井 哲二

2回 / 年 発行の「会報」第5号を皆様方にお届けすることになった。そして、「懇親会」も第三回目を終えた。倉本敏雄さんによる本会会員名簿の整備から約2年半が経過した。社会人としての最盛期を越えた大方の会員諸兄にとっては、一年一年がより貴重なものとして過ぎ去っていくのではあるまいか。そうした意味では密度の濃い2年余を皆様方と共に歩んできた。

第三回懇親会の席上で、「会報」への掲載事項や「懇親会」の在り方などについて貴重なご提案を戴く



NTT MUSASHINO R&D CENTER  
パンフレットより転写

現在の本館玄関付近

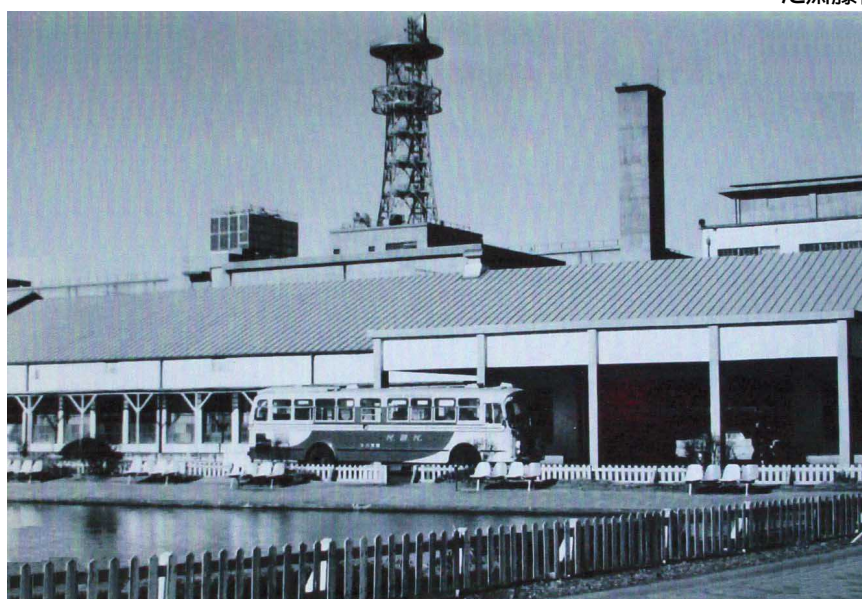
ことが出来た。そうしたご提案が本「第5号の会報」に早速反映され、従来の会報とは多少異なった内容となった。第6号も恐らく本号に準じたものとなるように思う。投稿原稿を主体とするこれまでの会報では、毎号8~10頁の誌面を埋めるための「原稿・添付写真」の確保が大前提であった。

今後とも会員諸兄からの投稿が一つの柱となっていくことには変りはないが、今回の会報では、懇親会出席者の「スピーチ録音」から稿を起こしたものが主体となっているため、坪井編集幹事長のご苦勞は従来とはまた違った意味で大変なものであった、と推察する。

今回の懇親会では、前会報でも紹介のあった斎藤哲也さんの卒研アルバムに残されている写真が、拡大して改めて披露された。

昭和40年度卒研究生を中心に写されている懐かしい数々の写真の中には、元気溍刺とした笑顔の「佐藤秀吉さん」の姿があり、胸打たれる想いがした。本会報には、高井さんのスピーチとして、新婚当時の佐藤さん宅を当時直接指導を受けた卒研究生が訪れた話が出て来る。そのときの写真もあった。大分傷んでいたが、坪井幹事の配慮により修復して本会報・当該箇所に載せることにした。

ここには、昭和40年当時の通研本館（一号館）玄関付近の写真を「斎藤アルバム」より転載し、



昭和40年頃の通研本館の玄関付近：「斎藤アルバム」より

現在の本館付近の様子をも併示した。約40年前の往時を偲ぶ一端になればと思う。

## 2. 「メール」と「ハガキ」による会員の近況報告

電子メール及び往復ハガキにて、お寄せいただいた「近況報告」を掲載いたしましたのでご参照下さい（名簿順に記載、カッコ内は発信日）

**佐藤秀吉様**（2004・6・22）

幹事役ご苦労様です。小生の体調の件につき、皆様に色々のご心配をお掛けし、恐縮に存じます。さてその寝ても覚めても（？）頭を離れない病魔の方は年々歳々手を変え品を変え当方が消耗し尽くすのを待ち構えているらしく、すっきりしない日が目立つ今日この頃です。

**内田正夫様**（2004・6・29）

今回も残念ながら欠席させて頂きたいと思います。体の方は足・腰の痛みがあるもののまあまあ状態ですが、時間的にゆとりのない毎日を送っています。

**島田慶甫様**（2004・6・25）

今度の会合には参加致します。昨夜、今井さんから電話を戴き少し長話を致しました。研究室側より参加できる者は二人ぐらいになりそうとのこと。少し長いメールを書き、99パーセント完成したとき、操作ミスで白紙になりました。それ故、これにて。

**宮嶋多喜男様**（2004・5・28）

多少痴呆が進んでいます。

**狩野哲光様**（2004・5・29）

今回は、体調がよくないので申し訳ありませんがパスとさせていただきます。盛会をお祈りします。

**倉本敏雄様**（2004・6・8）

いつも大変ご苦労様です。先日は本年度懇親会のご案内をいただき有難うございました。最近、体調が優れず、ぐずぐずしていますので、折角ですけど本年度の懇親会は欠席させていただきたいと思います。お集まりの節は皆様によろしくお伝えください。先ずは上記ご連絡まで。

**鈴木明義様**（2004・6・1）

相変わらず夕方の時間は都合が付きません。出席出来ず残念です。

**塚本一義様**（2004・5・26）

早くも1年経つのですね。近況は、去年創立したベンチャー企業（株）VRスポーツが、初年度よりわずかに利益が計上でき、法人税の支払い、株主配当など最低限の企業責任を果たすことができました。教育、研究、経営と相変わらず忙しい日々を過ごしています。懇親会でお会いできることを楽しみにしています。

**中村治時様**（2004・6・15）

いつも大変お世話になっております。お世話になりっぱなしで、申し訳ありません。そろそろ、不良会員で退会を命ぜられそうです。またしても申し訳ないのですが、今回も不参加です。反対方向に出かける予定をしているのです。返信をしていないのを思い出し、メール探しに四苦八苦。返事が遅れまして申し訳ありません。皆様によろしく。チョット前に、理科大音楽部の指揮をしていた印牧さんの70歳記念演奏会というのがあり、ついでがあり、見物に行きました。おばちゃんやら、関さんが登場。森脇さんなどが聴衆として来ていて、私たちの同期を含め、旧交を温めました。それではまた。

**柳川元様**（2004・6・19）

家庭菜園、鮎釣り元気と遊んでいます。当日は友人との旅行の計画があり、欠席させていただきます。

**小野雅敏様**（2004・5・29）

7月23日はぜひとも出席したいと思います。

（株）船井電機新応用技術研究所が4月1日に発足してから2カ月弱、通勤時間が30分弱の川崎暮らしも漸く慣れてきました。良い仕事をしたいと思って、励んでおります。小さな民間企業の運営の仕方について皆様のお知恵をお借りできたらと願っております。何卒よろしくお願いいたします。

**多村卓様**（2004・6・3）

ご連絡有難うございました。今年は、出席させていただきます。

ご承知のように昨年4月、ドミニカ共和国より帰国致しました。その時点でJICAとの業務契約は終了しましたが、個人的には現地側との残務で出たり入ったりが、しばらく続きました（国際貢献とは、こんな側面もあります）。昨年秋頃から、大学院でもう一度物理の勉強でもしようかと入学試験準備を始め、只今大阪市立大学の大学院・理学研究科（村田恵三教授）のお世話になっています。低次元有機伝導体に関する基礎的な

研究ですが、(私は)始めたばかりでありこれについてはえらそうなことは未だ言えません。干支で言えば三回り以上も違う若い学生諸君に混ざって学んでいます。

所で、理科大時代にパイブルのように勉強した(?) C. キッテルの『固体物理学入門』(丸善)は未だ物性物理の指導的な教科書で学生諸君に読まれています。増補・改定されて現在第7版(我々の時代が第2版)40年間の物性物理の進歩に目を見張る思いが致しました。こんな所が近況です。

**橋本 潔 様 (2004・6・2)**

7月23日の卒研生の会ですが、あいにく予定が合わず、不参加とさせていただきます。今後ともよろしくお願い致します。

**青柳 八郎 様 (2004・6・6)**

懇親会の件であります。大変申し訳なく欠席させていただきます。我が子の不幸で、気分の優れぬ毎日を過ごしております。当分の間、静かにしている積もりです。そのうち時間が解決してくれるものと信じております。

**小野沢 賢三 様 (2004・6・14)**

お世話になります。会合の予定がはっきりしなかったため、返信が遅くなり申し訳ございませんでした。ようやく7月の会合予定が決まったのですが、会合に参加する他の方々の予定等から、7月23日にも会合が入ってしまいました。と言うことで、残念ながら今年も参加することができません。今井先生をはじめ、皆様によるしくお伝え願います。毎回ご案内をいただき、参加できず、申し訳ございません。よろしくお願ひいたします。

**鈴木 威一 様 (2004・5・27)**

昨年10月に株式会社エグゼクティブ・コンサルティングを創設し、代表取締役役に就任致しました。とはいえ個人会社で、小使い兼社長(小使いの方が先になっている事に注意)と言う感じです。時々遊びながら良い仕事だけをやるという淡い期待は早くも破れつつあり、結構忙しくなって来てしまいました。今更ながら小使いの大変さを勉強しております。新会社になってからも月1回のペースで海外に出かけております。ビジネスクラスよりエコノミーの割合が増えては、ありますが……。会社を作って、良かった点は、自分で何でも良いと思えば直ぐに実行できる事でしょうか。独立されている諸先輩のご苦労が、多少分かってきました。例会を楽しみにしております。

(しかし)ストレスも溜まっていますし、問題だらけです。思いどおり決定できるという事と、思いどおりになると言うのは似ていますが、まったく違います。組織の1員で、廻りを気にしないで決定すると、独断だ何だと言われる訳ですが、そういう事が今は無いということだけです。その結果思いどおりになっているかと言えばそれは問屋が卸さないということでしょう。ストレスも問題も沢山ありますが、それこそが多分人生なのでしょう。

**高井 謙次 様 (2004・6・24)**

ご返事が遅れて申し訳ありません。先週実母が入院したことなどでごたごたしておりました。また、7月は昔勤務していた会社の同期会や趣味仲間の年1回の旅行などでスケジュールが確定できない状況でしたが、それらも決まりましたので7月23日の懇親会に参加させていただきたくよろしくお願い致します。

近況のご報告：母が6月17日に両目の白内障のため入院し、2回の手術後6月27日に退院の予定です。母の年齢も84歳となり、これから徐々に介護が必要となりますので、子供たち家族が協力して支えなければならなくなりました。小生は前回の懇親会でご報告した通り現在年金生活を送っており、晴耕雨読のような毎日、通勤の苦勞もなく平穩に過ごしております。ただ、イラク戦争が泥沼化し、三菱自動車のリコール騒動、日本の年少者による殺人事件の多発など、いままでの常識を超える出来事が多いのに戸惑いを感じるが多くなってきました。個人的には、何か平凡な目標を決め少しでもそれに近づければと思う今日この頃です。

**浅倉 晴雄 様 (2004・6・4)**

当日は私事都合により誠に残念ながら出席出来ません。小生お陰様にて身体はほぼ回復致しました。ご出席の皆様にはよろしくお伝え下さい。

**帯谷 達郎 様 (2004・5・30)**

私は、この3月に25年間勤めた会社を、定年退職日までの6ヶ月を残して早期退職致しました。本意ではなかったのですが、「会社業績悪化のため協力して欲しい」との社長直々の要請に応えたものです。

その後、ハローワークにて運良くテクニカルライターの職が見つかり、現在はその会社で、主に家庭用テレビのテクニカルマニュアル作成に従事しています。会社は横浜市内にあり、通勤も楽です。早く、仕事を覚えるべく心機一転頑張っています。悠悠自適には程遠い状況ですが、若い人に混じり、気も若くなりました。

今回の懇親会には是非出席したかったのですが、試用期間の身分でもあり、当日金曜日の有休はとりにくい状況です。さらに、次の土曜日は隔週の出勤日(15:00終業)であり、前日の仕事の仕上げ日でもあります。永年勤めた会社であれば、有休をとるのは業務に差し支えない限り、何ら問題なかったのですが……。

そのような訳で、まことに申し訳ないのですが、今回も欠席とさせていただきます。2年続けて欠席とは心苦しいのですが、残念です。今井先生、出席者各位にはくれぐれもよろしくお伝えくださいませ。

**梅原 弘 様 (2004・5・31)**

幹事ご苦労様です。懇親会は勤務の都合上参加できませんのでご連絡いたします。用件のみで失礼いたします。よろしく願いいたします。

**梅枝茂弘 様 (2004・6・3)**

ご連絡ありがとうございます。昨年は直前(7月22日)に父が亡くなり、葬儀と重なり慌しかったこともあり、ご連絡をせずに欠席いたしました。申し訳ありません。私は昨年11月に定年となり、その後引き続きタカラで嘱託として八千代センターで働いております。現在の主な仕事は若手社員の育成指導と海外生産工場での新製品立上げのための生産管理・品質保証活動の援助です。7月23日(金)の業務の予定は今のところはつきりませんが、当日会社を終了後、通研に向かってても終了時間の7時には間に合いそうにもありませんので、申し訳ありませんが「欠席」ということでお願い致します。

**武井 邦之 様 (2004・6・12)**

今回は欠席させていただきます。勤務会社は寺岡製作所で相変わらずですが研究開発本部から製造本部に移動となりました。今井先生、皆様によろしくお伝えください。

### 3. 第三回 懇親会 出席者のスピーチ(前半)

2004年7月23日(金)に今井研卒研生の会 第三回 懇親会がNTT武蔵野研究開発センター内「華迎」で開催され、出席された皆さんに近況報告を含めスピーチをお願いいたしました。高井謙次さんの提案もあり、スピーチ前半部分の記録を以下に掲載することといたしました。

#### 3-1. 開会のご挨拶 今井哲二 先生

毎日暑いですね。こういう暑い中、それぞれにご予定もおありであろうかと思いますがこの会に来ていただきまして誠にありがとうございます。

出席率が、出席者11名ですので全会員35人として一応30%。3割の方が出席していただければまあまあかな、というような坪井さんの感触もありまして、少し寂しいんですけども、今年もこの懇親会を持つことが出来て大変嬉しく思っております。

去年の懇親会から早くも1年経つわけです。マクロに見ると1年というのはあっという間に過ぎちゃう訳ですけど、ミクロに見ていきますと多分お一人お一人の中で色んな山あり谷ありではなかったかと思えます。特に定年の時期に差し掛かった方の「近況報告」などを拝見しますと、定年というのはやっぱり人生で一番大きな一つの出来事と言いますか節目になるわけです。そういう時期に差し掛かれた方、あるいはその前後の方々、非常にいろいろ問題が多い中で出席された訳です。あるいは初めて今回お見えになった方もおられますし、とにかく3割の方が出席されたというのは見方によっては、非常に意義のあることではないかなと思っております。

実は「会報」も含めてなんですけども、坪井さんがいろいろ苦労して会報を作っても反応が非常に鈍いんですね。それで私、塚本さんに、この会 一体「存続する価値があるのかな」と問い合わせたところ、塚本さんから慰めの返事がきました。とにかく皆様それぞれ自分の人生があり、あるいは自分の価値観がありという中で、塚本さんに指摘されて、「ああそうか」と改めて思ったことがあります。私にとってみると電子管から半導体へ移り変わる丁度その10年間で皆さんを卒研生としてお迎えした時期だったわけです。私にとってみると皆さんは、連続的に一人一人が10年間卒研生として来られたという、一つの流れとしての、固まりとしての存在というように私は受け取っていました。ところが皆さん一人一人にとってみると、例えば塚本さんの場合は8ヶ月しか通研にはいなかった。すなわち、60何年かの人生の中の8ヶ月が通研での卒研期間ですからそれを非常に重みのあるものとして感じられた方もあるでしょうし、まあ65年分の8ヶ月というふうな重みしか無い人もあるでしょう。人それぞれの価値観があるわけですから『まあ気楽にやっていったらどうでしょうか』というのが塚本さんからのコメントの結論でした。

それほど堅苦しく考えないで、お集まりいただける方 あるいは会報に寄稿していただける方、これらの方々には是非それをお願いをしたい。というわけで「まあ気楽にやっぴいこうよ」というようなことで、今回もやることになりました。それぞれの人生が全く違うわけですから、そういう違った経験なり教訓なりをこの場でそれぞれが披露し合う、あるいは相談に乗る、というようなことが出来れば、それはそれなりに非常に意味があることではないかなという気がいたします。そういうことで、反応の鈍さにめげずに頑張って続けていこう、という気持ちで今ここでご挨拶をしている次第です。

「会報」の発行からこういう「懇親会」のアレンジの一切を坪井さんが中心になってやっていただきまして、改めてこの席を借りてお礼を申し上げます。

ご多用中のところ、また初めての方もおられますし、この会にご出席いただきましてどうもありがとうございます。一言ご挨拶いたしました。

### 3-2. 乾杯のご挨拶 今井哲二先生

この会は昭和41年度の方が一番若いので、だから今後会員が増えることはないわけで、どんどん少なくなっっていくわけです。島田さんと僕が入っているある会もそうなんです。昭和25年に入った人でおしまいなんです。



どんどん会員が減っていくばかりで。だから、とにかく皆さん健康に注意をして、少しでもこの会のメンバーは固定して長くいて下さいますように。

塚本さんが今お見えになったので、塚本さんからわざわざ励ましの手紙を貰ったものですから、先ほどの話を少し繰り返させて頂きます。ほんとに私は、10年間コンテニユアスに、連続的に、皆さんを卒研究生の“一グループ”として把握しているのに対して、皆さん一人一人は65年分の8ヶ月であったり10ヶ月であったりに過ぎない訳です。それを私ちょっと勘違いして反応がないとか何とか言いまして、会の存続について気にしておっ

たことを悔やんでおります。塚本さんどうもありがとうございます。

皆さんの健康を祈って乾杯！

### 3-3. 塚本一義様

高松から来て、先回は始まる時間が遅かったせいもあるので、ほんのちょっとしか皆さんとお話しできませんでしたが、今回は少しゆっくり出来ます。

今、四国の高松におりまして、実は企業を一度定年しまして、その後香川大学に4年半ほどいたのですけれど、それも去年定年いたしました。今は客員教授として、あと5年間残って欲しいということで香川大学に5年間、つぎの定年は68歳なので自分でもびっくりしました。

どういうことをしているかと言うと、「ベンチャービジネス創生工学講座」担当で出来るだけ香川県、或いは四国から多数のベンチャーを創るということです。今、四国が全体的に地盤低下していますが、かつては支店経済ということで非常に栄えたのです。橋が3本、本州との間に出来まして、大企業の支店がなにも四国に置いとく必要が無くなってきて、かなり引き上げてしまいました。四国の経済を発展させるためには観光でもいいし、あるいは産業でもいい、いろんなことをやっていく必要があります。

私の場合は立場上、産業をもう少し四国からいろんな形で創り出したい。四国に限りませんが、その一つの突破口として大学発ベンチャーに注目したのが経済産業省の平沼プランです。四国は各県に一つづつ主要な大学として、高知工科大学、愛媛大学、徳島大学、香川大学があります。これらの大学と一緒に、いかにベンチャーを立ち上げるかということが私の現在の仕事で、これも誰かが時間を割いてやらないと誰もそんな面倒なことはやりません。来週も愛媛大学や高知工科大学を訪ねて行きます。行政側とか産業界はいろいろやっているのですけれども、四国の学術側の人にはなかなかそこまで時間を割いてはできないので、そこをやるのが私の現在の本業です。

もう一つは人に偉そうにベンチャーを創れ、つくれと言っても、そう言うお前が創っているのかと言われても何も言えないので、去年会社を作りました。会社を創るのは非常に簡単なのですがそれを継続して発展させるのが非常に難しいのです。私の場合は、皆さんのモデルになるように、すなわち成功例を創らないといけないのです。これも四国からいいベンチャー企業を多数創るためのモデルケースになるように頑張っております。来年の1月には東京ビッグサイトという展示場がありますけれども、あそこで4小間ぐらい借りて、大々的にPR展示をやり販売網を全国に広げようと思っています。時間がありましたら是非見に来て下さい。

初年度で既に利益を出されたとご連絡いただきましたが(坪井)。

大学発ベンチャーというものには多くの場合、デイス(Death)・バレーと言いまして「死の谷」というのがあって、3年位はなかなか利益を出すのは難しいわけです。利益を出さないうちに資本のいわゆる資金がショートしまして倒産もしくは開店休業というのがもうかなり出ています。3年間で1,000社創る計画で、今は820~830社あるのですが、もう既に倒産が出始めました。なかなか利益を出すのが大学発ベンチャーは難しいのですが、どういふわけか皆さんのお陰でそこそこ277万円という、普通の会社から見たら馬鹿みたいな数値ですけど、一応利益が出ました。来年はもっともっと四国のモデルケースになるように頑張りたいと思っています。

業務内容を一寸、バーチャルとリアルとの通信方法などの説明をお願いしますでしょうか(今井先生)

そうしたら来年は時間をいただいて、動画を持ってきます。大きなスクリーンあるいはPDPが液晶の大型画面のテレビでもいいんですけども、その前でサッカーだとかテニスだとかスノーボードとかをやっ、高齢者などがインドアでやりながら、健康とかリハビリに役立てば非常にいい訳です。われわれのもう一つの特長は、筋肉の訓練と関節の訓練以外に平衡機能訓練があります。

一過性のめまいを現在の複雑なストレス社会で感じる時がありますね。高齢になると筋力が弱まり転倒事故につながります。ところが目まいのリハビリといいますが平衡感覚に関する健康機器は殆どない。

もう一つ、これは皆さん技術者だから非常に面白いと感じると思いますけれども、東京ビッグサイトと高松のシンボルタワーとの間で実プレイヤー同士の通信ゲーム対戦を行なう予定です。これはバーチャルとリアルの世界をうまく画像合成し通信手順で融合させています。出来れば非常にセンセーショナルに取り上げてくれるんじゃないかと思っています。来年の春はそういう企画もビッグサイトの中でやればと、今開発をしているところです(塚本)

### 3-4. 多村 卓 様

今井研の懇親会の発足から3回目によく出ささせていただいたということで、よかったですと思っています。私は長い間、実は塚本さんと同じ企業(三洋電機(株))におりまして、塚本さんは研究室の方でいわゆるエリートであられる。私はどっちかといいますと工場の方で、ナツパ服に油で汚れながらやってきたような技術屋でございます。

いろいろところで通研の思い出を語らせていただきました。あまりいい学生ではなかったようで、装置は壊すわ、どえらいことをやらかして。それのお陰で、有難い事に私は工場に行きましてから真空関係の装置の立ち上げということで、真空蒸着装置をどうしても導入するという。しかもその量産用ということで、お前が一番良く知ってるだろう、と。そんなことで、真空蒸着装置のオーソリテイ だなんて言われ、結構気分をよくしていました。

定年を迎えてまだ仕事をしたいということで、ドミニカ共和国の方へ、JICAのお世話で行ったわけなんです。そこのお話は会報にも記載させていただきましたけれども、一つだけ、開発途上国の中で日本人が考えている日本人像というのか、日本の工業技術に関する発展の過程と海外の人達が考えている考え方とは偉い違いがあるということの一例を、お話ししたいと思います。

私は色々な所で、品質管理をやっていたこともあって、珍しがられました。大学だとか、それから色々な異種企業からの誘いがある。とにかくいつもそこで言われることは「日本の科学技術は、工業技術を含めて、技術はどうしてこんなに進歩したか!」、という話をせよ、ということをよくテーマとしていただいたわけなんです。

私自身は家電というところの分野で非常に狭い、しかも設計技術をやり品質管理をやりというように経験をしてきましたけれども、そういうところを見てきて、日本が1945年に太平洋戦争が終ってから、営々と日本

人の努力によって築いてきた科学技術、それから工業立国としてこうなってきた過程というものをよく話しをして差し上げたのです。

その中で私が印象に残ったのは、サント・ドミンゴ自治大学という国立の非常にエリートの大学ですけども、この大学院で、専攻がたしか経営工学の学生さんに対しての話だったんですけども、いろんな話をした後



に学生さんが質問を私にするには、『日本の工業技術が発展した一つの礎は、デミング博士<sup>(注1)</sup>の貢献が非常に大きかったのではないかと、圧倒的にそういう風に学生さんが理解されているんです。デミングという我々品質管理をやってきた人間はよく知っている名前ですし、戦後間もなく日本に統計的品質管理という手法を初めて導入した人です。それまでの日本人には物を作るときに「バラツキ」という発想があまり浸透していなかった。初めてデミングが戦後間もない日本に来たことによって物作りのためには、バラツキという概念を導入しなければだめだということを、理論的にも実践的にも導入されたのがデミング博士の一番大きな貢献だろうと思

っているんです。ですから我々にして見たらデミングの貢献はそれだけのものであって、以後はその思想を受け継ぎ発展させた日本人の努力による発展なんです。

ところがドミニカ共和国の学生が非常に極端な理解をしているんです。また麗々しくその教授をおやりになっている方もそういうような話をするんですね。それは間違いである、ということと話始めたら、もう教授がそわそわし始めましてね、『自分の今まで喋っていることと多村が言うことは違ってくる』、ということになりましてね。じゃあもう話を止めようかという気になりましたが、折角時間をもらっているから続けてやりました。

『あなた方は経営工学というものを専攻されてるから、日本のことについてものすごく興味をもっておられる。デミングなんて云ったら日本人以上に良く知っている。じゃあ一つお尋ねするけれども、松下幸之助という名前を皆さん方聞いたことがありますか？』という質問をしたんです。そうしたら何と40~50人出席していた学生の中で「松下幸之助」という名前を知ってる学生は一人も居なかったんです。逆に今渋谷の駅で学生さんを捕まえて『松下幸之助という名前を知っていますか？』と仮にこうインタビューしたとといたら、可成の今の学生が「ああ知ってますよ、お金持ちでしょう」とか、あるいは「松下電器を創った人でしょう」とか、こういう答えが返ってくると思うんですよ。むしろ渋谷の学生に『デミング博士って知ってますか？』、というと『そんな人知りません、その人誰ですか？』と言う答えだと思っただけです。で、ドミニカ共和国ではデミングは有名だけれども松下幸之助は全然有名じゃない。この理解の的が外れている、というかズレている。これはやっぱり日本が外国からこのように誤って理解されている一例ではないか、ということですね。つくづくこのことでは思いを深くしたような次第なんです。これを語りはじめれば、科学技術に対する教育の問題などまだいろいろあるんですけどもそれはまた別の機会にするとして、2003年に日本に戻ってまいりました。

これからは「サンデー毎日」をやらないかなと思った時に、ふと考えたのが昔今井研で勉強した固体物理学をもう一度勉強したい、と言う気持ちになりました。大阪市立大学大学院理学研究科の村田恵三先生の門を叩きまして、私を研究室に入れて貰えないだろうかとお願したわけです。先生は嘗て電総研に長く居られた方で、さっき小野さんとお話ししてたら、「多分知っている人だ」と云われておりました。先生の方は小野さんのことはよくご存知なんです。『小野さんのお友達の方ですか、小野さんは有名だったんですよ。じゃあ、あなたもいいですよ』、ということで潜り込ませていただいた次第なんです。でも、先生曰く『勿論、入学試験はやりますよ！』、ということで、何十年かぶりに量子力学の本を紐どきまして、井戸型ポテンシャルの固有値、固有関数云々を一通り勉強しまして、研究室に入れていただいているんです。

60歳過ぎてから研究室に入るのは珍しい存在で、マスターの一年生 - M1ですから、仲間の20代前半の、私の息子よりもまだ若い学生さんと一緒に、ああでもないこうでもないということで議論するときがあるんです。やっぱり学生さんは、まだ実務経験が浅いですから、「さすがに社会人というのはいろいろ経験されているんだな」ということで、重宝がられている面もあるし、教授からは『勉強はいつでもいいから研究室にいて、そういうことを言うてくれや』というふうに言われており、ずうずうしくやっております。